

【特別支援学校のセンター的機能】

～しろがね特別支援学校による地域支援～

特別支援学校のセンター的機能として、専門アドバイザーが中心となり、前橋市・渋川市・吉岡町・榛東村の小学校・中学校・高等学校・幼稚園・保育園を訪問したり、保護者の悩みを聞いたりして、発達の気になる子ども達についての継続的な支援を行っています。

4～12月までの相談依頼の件数(外部支援)

対象	幼稚園 保育園	小学校	中学校	高等 学校	その他	計
件数	166件	420件	43件	8件	18件	655件

(その他は関係機関からの相談および研修の講師依頼)




専門アドバイザーの仕事を紹介します。

学校や園にはいろいろなお子さんが在籍しています。担任の先生の中には、1クラス30名ほどの学級の中にも3、4名の気になるお子さんがいると話される方もいらっしゃいます。

ましてや、小学校1年生は幼稚園・保育園とは生活の流れが違い、さらに、学習も加わるため、困難を感じているお子さんは多く見受けられます。

しかし、幼稚園・保育園の年長児の担任の先生も、いわゆる小1ギャップを埋めようと一生懸命取り組んでいます。

ある保育園、年長クラスの取り組みを紹介します。

朝の会では、子ども達が単語を反対から読んで、実際の単語を答えさせる問題を皆に投げかけます。例えば、「りぎにお」という質問に対し、分かった子が「おにぎり」と答えます。これは、おにぎり  という実物は「お」

「に」「ぎ」「り」という4つの音がその順番に並んで構成しており、1番目の音が「お」であり、3番目と4番目の音を削除すると違う単語である「おに」となるという音韻認識・音韻処理を学ぶこととなります。単語は音から成り立っており、消去や追加、言い換えが可能であるというこの音韻認識が乏しいと、単語や文章を読み書きすることは難しくなります。語頭に「あ」のつく言葉を集めたり、しりとりをするのも同じ音韻の学習です。このように遊びの中で、学習のレディネスの形成を図っているのです。

また、「りぎにお」を「おにぎり」に変換するとき、何回も「りぎにお」と言って記憶を保持する方法や親指に「り」、人差し指に「ぎ」、中指に「に」、薬指に「お」と音を置き、薬指から読んでいくという方法で答えを導き出す子がいます。音を保持する方法である「音韻ループ」と指の位置（空間）で覚える「視空間スケッチパット」のどちらが記憶しやすいかを子どもなりに考えて使っているようです。

このクラスでは伝言ゲームやヒントゲーム（ヒントを言って何の食べ物かを当てる）も取り入れていました。伝言ゲームは記憶の問題だけでなく、隣の人には聞こえるように言うけれど、その他の人には聞こえない大きさを話すという、状況に応じた声の大きさも学べます。ヒントゲームはなるべく少ないヒントの数で友達が当てると勝ちなので、どういうヒントを言えば相手にわかりやすいかを考える学習にもなります。

子ども達は慣れるととても工夫してクイズに取り組んでいます。遊びの中で自然に鍛える記憶力や音韻の学習、わかりやすく伝える方法などはすべての学習につながるものであり、遊びの中で学べるというのは良いことだと思いました。

良い実践を今後もお知らせしていきたいと思っています。

日頃から、本校のセンター的機能の御理解と御協力をありがとうございます。障害の有無にかかわらず、子どもの実態把握・指導内容・指導方法について悩んでいることがありましたら、お気軽に御相談ください。

お待ちしております。



群馬県立しrogane特別支援学校
専門アドバイザー 尾岸 純子
電話 027-268-6111
FAX 027-268-6113
mail shirogane-snes01@edu-g.gsn.ed.jp